

南空知高校テニス

# メンタリティ講座 2

プレースタイル play style の 自問

## 1 国語辞典

小学生の頃に初めて紐解いた国語辞典。この書物は、彼の知らない日本語について、漏れなく……例えば、「紐解く」は「(書物を)開いて読む(大修館書店・明鏡国語辞典)」というふうに、わかりやすい言葉でその意味を教えてくれたはずでした。

「アイデンティティー identity」という厄介な言葉との最初の出会いを、多くの日本人は、高校の国語の授業か、受験勉強の中で経験します。彼もやはり、現代文の問題集の中でこの言葉に出会い、いつものように国語辞典に助けを求めたのです。

「アイデンティティー：自己同一性。自分という存在の独自性についての自覚。(三省堂・新明解国語辞典)」

虚ろな言葉たちの連なりは、いっこうに意味を結ぼうとしません。

「アイデンティティー：自己が他と区別されて、他ならぬ自分であると感じられるときの、その感覚や意識を言う語。自我同一性。(大修館書店・明鏡国語辞典)」

読めば読むほど解らなくなるのです。自己同一性……何と何が同じだというのか？ワッケワカラン……国語辞典は、結局、彼に何の手がかりも与えてはくれませんでした。

そんな彼もいつしか恋をして、やがて当然のように失恋の時を迎えます。別れ際の彼女の何気なく、そしてあまりにも残酷な言葉……一緒にいると、とっても楽しかった。でも、別にあなたじゃなくても良かったの……そして、彼のアイデンティティーは見る影もないのです。

## 2 同一視 identification

ある特定の先輩のプレーに憧れるテニス部員は、ストロークやサーブのフォーム、そればかりかプレーの合間のちょっとした仕草や話し方、服装の趣味まで、先輩とそっくりになってゆきます。彼は、意識して先輩を手本としたり、見た目だけでも先輩のマネをしようなどと考えたわけではありません。にも関わらず、似てくるのです。

人間の心には「意識できている部分」と「意識できていない部分」があります。彼のプレーが先輩と似てきたことには、この「意識できていない部分」が大きな役割を果たしています。彼は直接自分のプレーを見ることができな一方、尊敬して憧れる先輩のプ

レーはじっくり見ることができます。それを毎日続けているうちに、彼の心の中の「意識できている部分」は明確に自分と先輩とを区別していながら、「意識できていない部分」（無意識）は、今ボールを追いかけラケットを振る先輩の姿を、自分の姿だと誤って認識してしまうのです。それを繰り返すうちに、彼は無意識のうちにどんどん先輩に似てゆくのです。このことを、19世紀オーストリアの精神分析学者ジークムント・フロイトは「同一視 identification」と呼びました。

すぐには叶えられない強い願望があるとき、その願望が強ければ強いほど、それを叶えられないことによるストレスは大きいものです。そしてこの願望（例えば、テニスが上手になりたいということ）の象徴となるような存在（先輩や先生など身近なプレーヤーだったり、ナダルやフェデラー、シャラポワだったり）のラケットの振り方や服装、振る舞いを自分の中に採り入れることによって、願望そのものは叶えられないまでも、叶えたことに近い充足感を手にすることはできるわけです。このような心の働きを心理学では「防衛規制」と言います。そして、このような同一視による防衛規制の結果、自分の未熟さや力不足を原因とするストレスからは、とりあえず解放されます。そしてこの一連の経過の中で、若者の心は成長し、能力の獲得（テニスの上達）にも近づくのだと心理学者は指摘します。

同一視（アイデンティフィケーション identification）は、自己同一性（アイデンティティー identity）とは全く異なるメンタリティです。しかし、テニスの上達という面では、きわめて健全なプロセスだとも言えるわけです。

### 3 古語辞典

古典の勉強を始めようというわけではありませんが……、古語辞典で「まね」を引くと、次のように書かれています。

「まね（ナ下二）そっくり似せて行う。（岩波古語辞典）」

「まね」の連用形「まね」は「真似」という名詞になります。つまり、模倣すること、誰かを見習って、真似をすることです。「真似」という名詞に「ぶ」という接尾語がついて「真似ぶ（まねをする）」という動詞が派生します。「まねぶ」は、さらに音韻変化（母音交代）によって「まなぶ」となり、「学ぶ」という日本語が成立しました。「学ぶ」の語源は「まね」、つまり「真似」や「模倣」ということなのです。

「まねぶ（ハ四）①口まねする。まねして言う。②修得する。教えを受ける。習う。（ベネッセ全訳コンパクト古語辞典）」

そのことを思うと、フロイトの言う「同一視」という無意識の心の働きはとても興味深いのです。理想のプレーヤー（先輩やナダルやシャラポワ）がいて、その人に対する「憧れ」や「尊敬」などの肯定的な強い思いは、そのプレーを一生懸命に見るという行動に駆り立てます。試合を観戦するような場面では、あたかも自分がその試合を戦っているかのように感情移入してカウントを数え、喜んだり、悔しがったりして準体験（映画を観たり小説を読みながら、心の中でその主人公と同じ体験をして、同じ気持ちになること）をします。そして心の中の「意識できていない部分」（無意識）が、自分自身がプレーしていると勘違いするまで真剣にそれを見続けた結果として、無意識に理想のプレーヤーを模倣

する「真似まねぶ(まねをする) = 学ぶ」ことが「同一視」なのです。

とすれば、テニスで「学ぶ」は、「見る」と同じ意味でさえあります。すべての始まりは「上達したい」と強く願うこと。意識して「まねよう」「似せよう」とする必要もありません。憧れ、尊敬し、そして何よりも見続けることなのです。やがて「同一視」のカリキュラム(教育課程)を卒業したテニスプレーヤーは、いつしか本当に自分らしいプレースタイルを見つけるに違いありません。

#### 4 自分は何者なのか・・・

ワールドユース選手権の期間中、ぼくは選手達を連れて、ナイジェリア北部、イスラム地区のバウチ市にある孤児院を訪問した。アフリカの監督時代に僕たち夫婦が触れた人々の暮らしに目を向けさせたい、物質的にも経済的にも恵まれている彼らの日常とは違う生活が、この世にあることを肌で感じてもらいたい、と思ったのだ。

20歳に満たない選手達に、サッカーのスターであることを忘れさせ、わずか数時間とはいえ、ひとりの人間として過ごしてほしいと思ったのだ。最初のうち、選手達は、孤児院の非衛生的な環境や、子供達の痛ましい境遇に戸惑いを隠せない様子だった。目の前にある世界は、自分は何者なのか、日本の豊かさや自分達の幸福などを考えさせる鏡になった。

何一つ不自由のない生活を送り、マスコミからもてはやされ、与えられることに慣れている選手達は、見慣れない光景に居心地いごこちが悪そうだった。しかし、時間がたつにつれてリラックスしてきた選手達は、子供達を腕に抱くなどして交流を始めた。

ぼくたちみんなが人間として、強烈な何か、そして素朴そぼくな何かを経験した。なぜなら、フランス人であれ日本人であれ、不幸の境遇にある女の子の頬ほほにキスをするのにパスポートは不要だからだ。別れを告げる前に、子供達、選手達、孤児院のスタッフみんなと一緒に写真を撮った。それはとても美しい写真だった。

(フィリップ・トルシエ著「Passion情熱」より)

「監督という仕事には、何よりもまず教育者であることが求められる」と言うトルシエ元日本代表監督が若きスター軍団を孤児院まで連れて行った目的は、一言で言えば、日本人選手けいもうの啓蒙ということに他なりません。無知蒙昧(むちもうまい:知識がなく、愚かでものの道理に暗いこと)なるバーバリアン(未開人)としての日本人、中田、小野、稲本、高原らに、洗練されたヨーロッパ的個人主義をたたき込もうとしたのです。なかんづく、彼を最も苛立たせる日本人選手の特徴は、練習の合間や宿舎での自由時間に、気心の知れた“仲良し”の友達とばかり一緒にいようとする姿勢、そして監督である自分やチームメイトに対する自己主張あいまいの曖昧さでした。彼はそれをアイデンティティーの問題と考え、選手達の意識改革に取り組むこととなります。

自分は何者なのか・・・この人間として最も基本的な問いに答えるための第一歩は、自分とは異なる人々の中に身を置き、自分との違いを通して彼らを理解することです。孤児院への慰問も、まさにそのことが目的でしたし、同じ理由から、彼は選手のヨーロッパ移籍しょうれいを奨励しました。そして実際に多くの選手が世界のトップリーグに巣立っていきます。

トルシエに対する代表監督としての評価はさておき、彼が日本人選手に対して指摘した

ことの多くが、現代の若者の未発達な心の側面を言い当てていることは事実です。気心の知れた“仲良し”の友達とばかり一緒にいようとする姿勢に対する彼の指摘は、私達教師が高校生の日常に接するなかで、しばしば気にかけて頭を悩ませる問題でもあります。自分とそっくりの“仲良し”に囲まれた環境に身を置いてそこから一步も外に出ようとはせず、時にはその居心地の良い環境に入り込んできた異質な他者を排除しようとさえする、例えばこのような「いじめ」の病理は、未発達で洗練されない心に原因があることは言うまでもありません。自分とは異なる人々の中に身を置き、自分との違いを通して彼らを理解することが「自分は何者なのか」という問いかけに対する答への第一歩です。そしてその答を探そうとする努力は、サッカーやテニスのプレーヤーとしてに留まらず、人間として成長する上で、決して避けては通れない道のりなのです。

## 5 アイデンティティーの輪郭

とりとめもなく考えるうちに、アイデンティティーというものの輪郭は、おぼろげながら見え始めてくるのです。それは一つには、現実の自分を正しく認識し、正しい自分像をイメージとして作り上げること。また一つには、「自分は何者なのか」という問いに正面から向き合うことです。

自分が自分でなければならぬことの意味……現代文の授業でアイデンティティーという言葉が最初に扱うとき、その意味を私はこう説明して、生徒達にはとりあえず解ったつもりになってもらうことにしています。そしてこの説明が、本質の一部なりとも言い当てているとすれば、テニスにおいて自分らしいプレイスタイルを獲得することは、上手下手や、強いとか弱いとかいうこと以上に、その人のプレーヤーとしてのアイデンティティーに関わる重要なテーマということになります。そしてここで言う「自分らしいプレイスタイルを見つける」という表現は、アイデンティティーという言葉の本質を正確に捉えています。心に思い描いた自分のプレーのイメージが、実際のテニスコートでボールを追いかけ、ラケットを振る現実の自分に過不足なく重なる（イメージされた自己と現実の自己との同一性が獲得される）。言い換えれば、長所も短所も含めた自分の能力が正しく把握できる、その上で、「憧れの先輩みたいに」（同一視）ではなく、自分にとって最も自然で、最も力を発揮できるスタイルでテニスができるようになることが「自分らしいプレイスタイルを獲得する」ことに他なりません。

ハードヒットだとか、プレイメントだとか、そんな十把一絡げの単純な言葉が重要なものではありません。大切なのは「自分らしいプレイスタイルは？」と自分自身に問いかけること。そして、孤独なシミュレーションを繰り返す中で、その問いに答えようと努力することです。それは、「自分は何者なのか」という問いかけに答えるための努力、自分が自分でなければならぬことの意味を探るための努力と全く同じです。アイデンティティーについて考えることを通して、テニスプレーヤーとしての優れたメンタリティを身につけることは、人間としての魅力的で豊かな心を持つこととほとんど同じ意味を持っている、私はそう考えて疑うこともないのです。

(2006.8.11. 栗山高校 佐々木雄介)